事情

明治太平記

四編

上

村井靜馬編輯

特へ遠14
2504

特
門へ遠 14
2504
26-7

官許

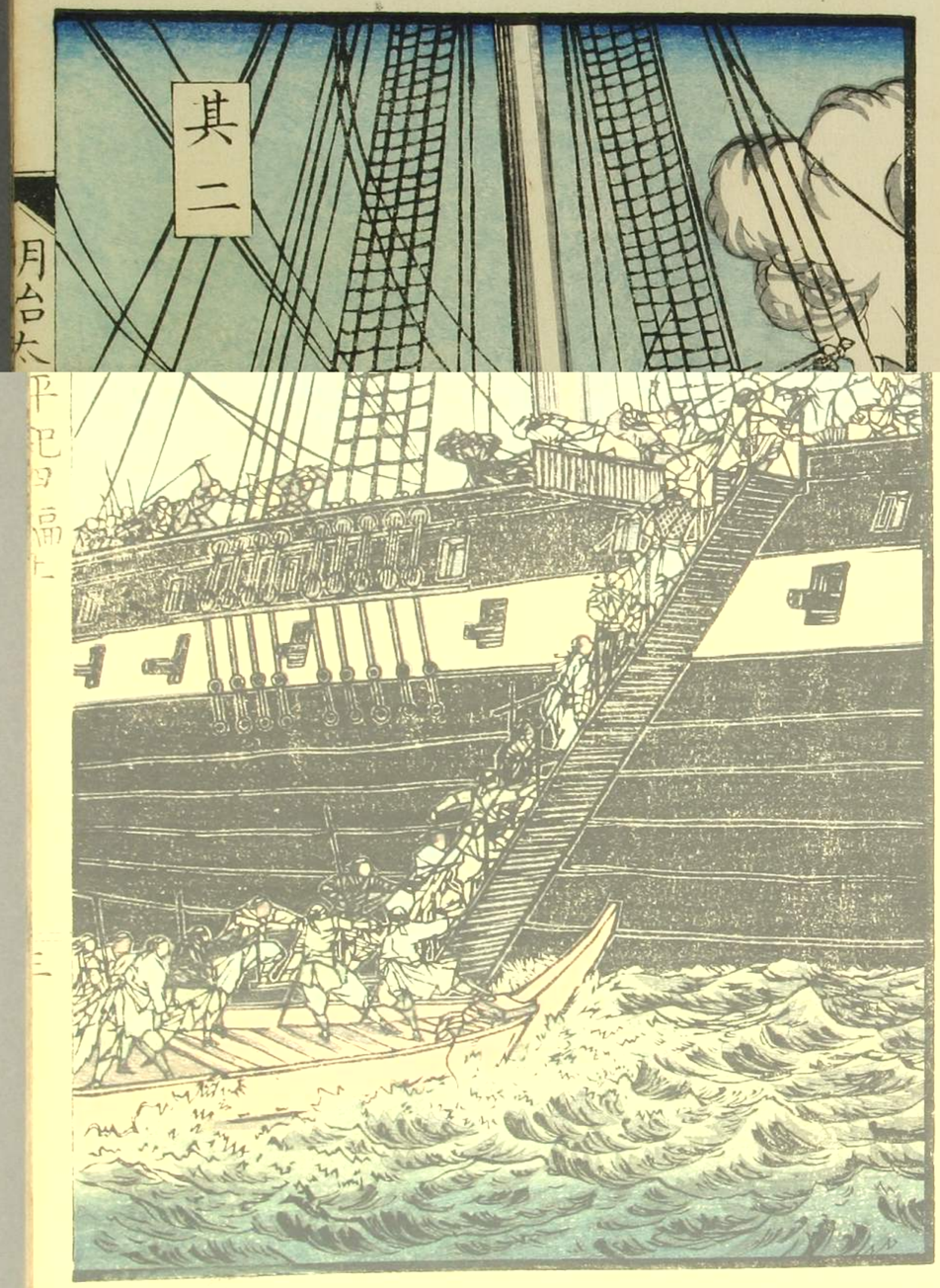
明治大平記 全

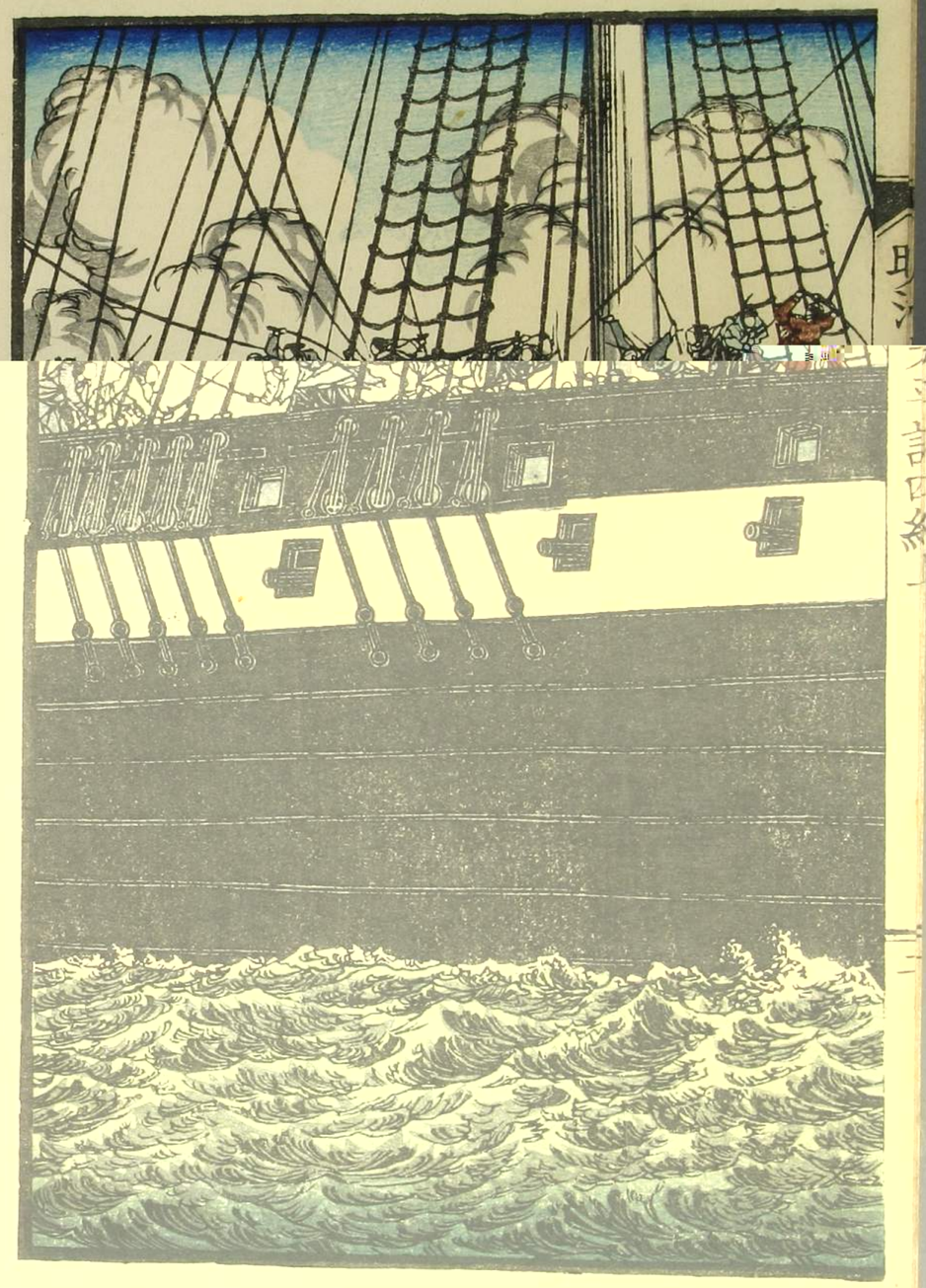
村井静馬 編輯
鮮斎永濯 画

東京書林 延壽堂蔵版

戊辰以隆
非を悔ふ
懲して過
奥羽越の
抗せしも
倣ざる者
して諺よ
官許明治

宮古港より脱兵
敵の軍艦と襲
て大より力戦ま


其二
月台大



巻之弐

脱兵水陸より福山の城を逼りかなを攻取るより起り松前藩防戦の策を失ひ所々の砦を拔れしを依り再挙の時を俟んとて遂に熊石を退去するを終る

賊軍一回勢ひを得て松前家敗逐ひ走らせ蝦夷地を畧定かるを起り官軍甲鉄艦以下数隻を率ひ大挙して函館を向ひ稍戦争を及ぼんとするを終る

太平記四編巻之一

東京　村井静馬編輯

脱艦蟠龍丸より乗たる兵士等ハ福山湾を
ゆて此地の形状を窺ふを抑福山の城と言ふハ海
を離る支僅かに二丁餘りかをを湾中殊を
岸入多く冬分ハ浪暴くして蒸気船と言ふと雖も
暗礁近づく支能ハず且つ六ケ所を砲臺を築たく
輙く礁岸の備へ整ひたる最も堅固の城なるが今賊船の
防御

入ると見るより松前の兵士等ゞ砲臺及び這所彼所
なる山谷或ひハ樹間より一時ゟ砲を發する程ゟ
蟠竜丸なる兵士等ハ此挙動を見るゟも偖ハ
櫻井ゞ遊説届ぬを敵の色ゞ顕はるゝハ須臾も
猶豫ゞなしして彼湾中を縦横ゟ乗りたる船を運
轉させて飛来る弾丸を避るゞ這方ゟも柘
榴弾を臺場を目ゞけて撃掛々々數刻の間砲戦
為たるゞ日もやゝ西ゟ傾く頃忽ち二十四斤の

實弾船の上官室を打抜きたり其餘も許多の弾
丸船の左右ゟ中るゟ風波ハまゝく烈しくあるく恁
くハ迚も着ゟ乗つゞ攻登らんと亘れバ遂ゟハ船
を引返しく躰て函館ゟ無還り松前ゟくの挙動を
箇様〳〵と報知るゟぞ脱走の將士等ゞ斯の如くふ
松前藩ゟて我ゟ抗る勢ひなりバ此上ハ大挙しく
一時ゟ城を乗取らんとて榎本釜次郎　松平太郎等
回天蟠龍の二艦ゟ乗ゞて福島湾ゟ乗入れた又

彼の大鳥圭介ハ陸軍の兵を引く原
歳三と一手より福島邑へと進み
家の警衛の兵備へ居たるべ賊軍
砲を發し〳〵く防ぎ〳〵ど海陸より
終よ支ゆる支を得ず動と崩れて敗走
先や本城よ逼らんと茲よて大
を二手よ分け一手ハ本道より進む土方ハ陸軍の兵
を經く城の後ろ兵を廻せば此地一手ハ山路
よ臨く四天九も

打村よ屯せ〳〵土方
此福島ハ松前
寄せると見るより
く攻蒐けたれば

風波を冒し〳〵く福島を發し直ち
りく陸軍の兵と俱よ稍本城よ近
山の城と言ふハ既よ嚮ども記
よ近〳〵と又ども後ハ地蔵山と
りて築き立る城なる故その地勢
門を離ること凡一町ばかり
を構へり殊さ〳〵道路屈曲し〳〵く進
〳〵ば此坂下よ市街ありく城の用
ハ福山の湾中よ入
付たり余ハ福
如く一方海岸
ハ高山の麓よ據
頗る高く偖城
最もけわしき坂
よ甚ぐ便り善
便を足るべし

夫より又六七町距りて一ツの小山あり此山上に寺
あり境内最も狹うれば脱兵等をその寺に
據りて假に陣所と定めて更に斥候を遣はして
城の動静を探らしむるに城門を堅く閉ぢ兵士
一個も見へずと言ふにぞ尓わるべ方略を設くべし
とて精兵數十に計策を授け近傍なる樹間に潛
ませおのく鉄砲を構ひ居て敵城門をかし開くべ
連発せよと申し含め自餘の兵士を本道より坂を

超へて城に逼りて一度に吐と鬨を揚れば敵かし
寄せぬと見るより福山の城兵等ハ只一戦に追
崩さんと城門左右に押開き我後れじと撃て出
る彼時分をよしと林間に潛伏ゐたる脱兵等が
筒先揃へて打蒐れば思ひがけなき支なる故城兵
大いに狼狽しくいまだ一戦に及べざるに崩れ立て
引退くるぞ脱兵あれよ勢ひ強く得て附入りよせ
よと勇を立追ふて最も急かまべ門扉を閉る

暇もなく咸本丸より逃入りたり仍て本道より進
む〻兵ハ輙く追手を乗取りぬ此時田天丸は乗り
組たる海軍の兵士等も陸軍より力を戮せて頻りに
砲を発ちれば又山路より進む〻兵を彼の地蔵山
の嶮岨を越へて城の後ろふ至りしに城兵ハ只前
なる敵を防ゲんとのみ衆力を尽して後ろの方へ嶮を
憑み介だり護りも嚴ゐざれば柵を破りて篭
入るみぞ松前の藩士等も爰を先途と戦へども

前後より敵を引受て夾み打るさらぬ支更遂に支ゆる
支を得ず或ハ戸処より討死し或ハ城を抜出て脱
し去りしも尠なく勢ひ已に窮まりしかば松前の
藩田村某艇に城中より火を放ち烟りの裡に自殺せり
是より於て福山の城忽ち落居して賊の所有となりし
なぞ是より先に松前の藩主志摩守ハ同國江刺と
言ふ所に在り又館村と言ふ地ふも近頃新城を築きて
爰ふも人数を篭置しかば福山に死と脱し兵を

咸此両所ゟ逃来り賊の猛威の熾んなるを箇様々々と
告るゟぞ藩臣安田拙造なる者勢ひ防ぎがたを察し
頻りゟ藩主を説勸めて他邦へ遷らしめんとせを同藩
鈴木田崎の両士安田ゞ因循なるを怒り逼りて渠を
殺せしゟ一藩為ゟ驚擾せり尓程ゟ脱兵士等ハ既ゟ
福山を乗取らしゟ此勢ひを抜ぎして江刺及び舘
村の両所とも攻取らんと海陸の兵謀計を合せ則ち
土方歳三等ハ兵を引き本道ゟ進み又松岡四郎

等ハ間道ゟ發まれば榎本等ハ水軍を率ひ開陽
艦ゟうち乗りて函館港を出帆を倦く十一月十二日松
岡ゞ一隊ハ稲倉石と言ふ所ゟぞ間道を経て進み
ゟ松前家の戍兵等ゞ險岨ゟ據て関を居へ賊兵来る
と見るゟうも砲を放ちて遮るゟぞ勝誇りたる脱兵な
ほど嶮路なる故進みかねて須臾たゆたひ居たりしゞ
松岡忽ち一策を設け偃強なる壮士を選み候の嶺
ゟ攀登らせ彼戍兵等を横撃ゟせしゟば戍兵大いゟ

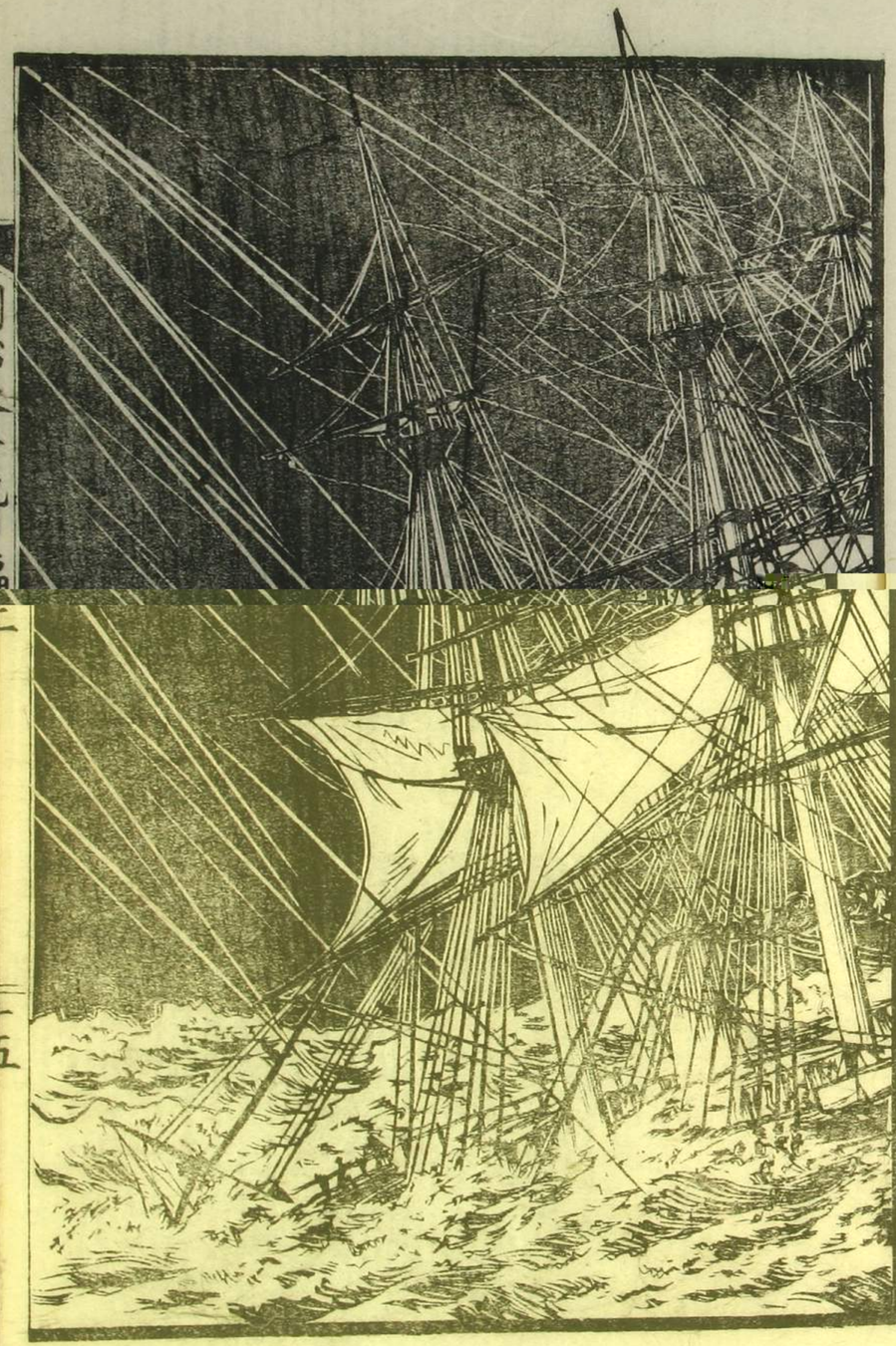
賊兵一策
稲倉石の
関兵を狙
撃ま

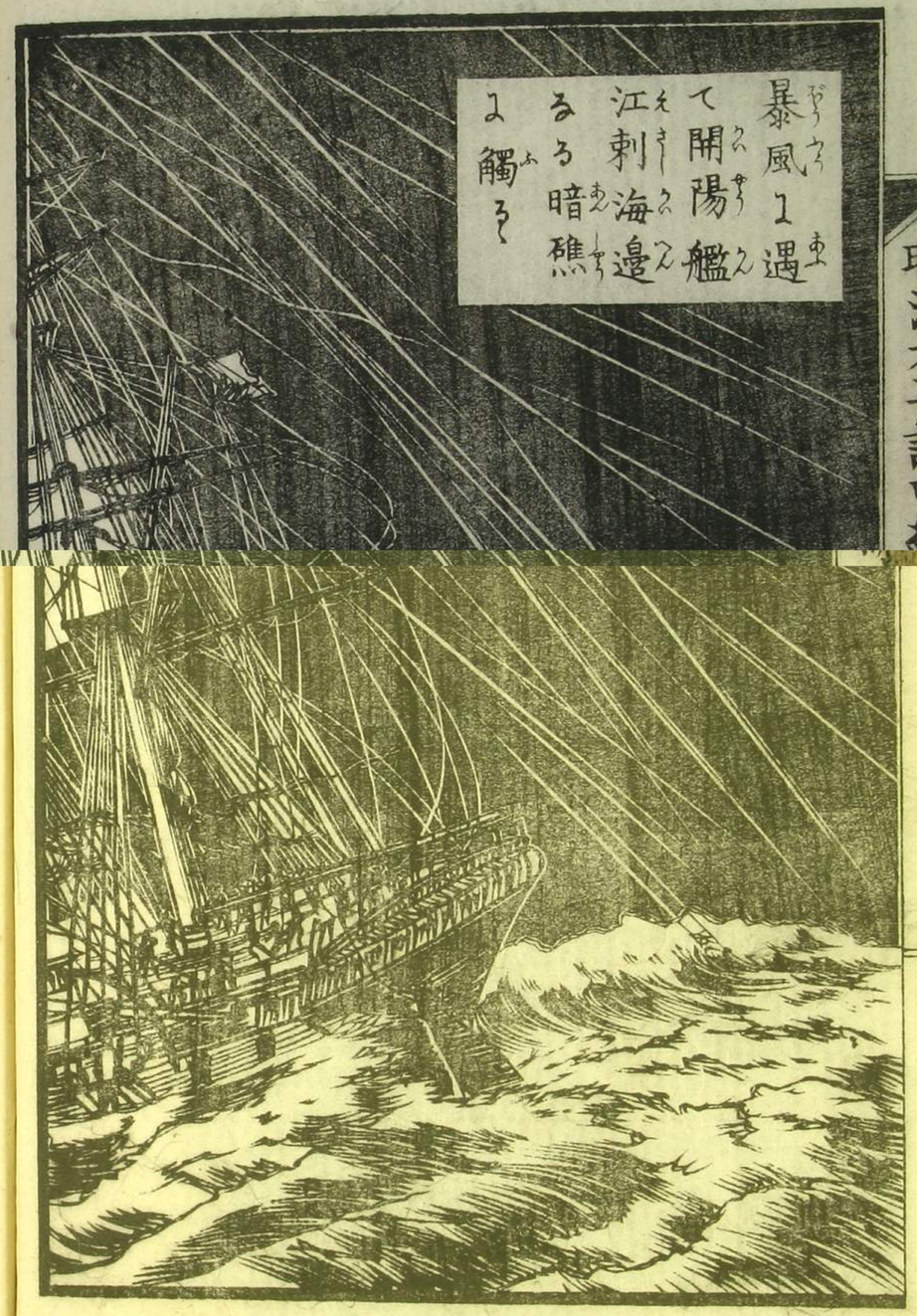
辟易して遂に支ゆる支を得ず関を捨て
又土方が一隊の兵は本道を経て十三日に
言へる所に至るや這所にても松前の衛兵
據て戍り居たる砲撃するを数合に及び
士を追退け直ちに此険をうち越へて
と進発せ偖十四日の暁頃に榎本等
陽九にうち乗りて松前の海岸を巡り
海邊に錨を卸して夜の明るを待つ程

一二の篝火の不明見ゆるだになりしが
天の明るに雪は満山に降積りて寒風の烈
耳鼻を削るが如く遥に陸地の方を見
らく人音あり先づ試に砲を發
度に及べども復一人の敵兵だも見へず仍
下りて上陸して土人と呼びて詰めるに
昨日まで此江刺に居られしが敵の勢ひ
諸口に出せし戍兵の追々敗して逃飯

勢を以て大軍を防ぐべきにやうなくして主従僅うよ
七十人夜前より乗る海を渡りて熊石といふ所より陣
所を替られたりと言ふ
等ハ江刺をば奪ひて兵
榎本ハ尚船に在りて陸
居たりしに其日も既に
立て夜に入る程まで
絶切る勢ひなれば此
暮れ頃より卒に風波起り
烈しく開陽丸の纜も殆ど
仆船を海岸に置き倘暗
礁に乗上るばかりなる
中へ出でしにて頻り
効毫程もなく遂に浅
事に及ぶべきなれば速く沖
触しくば再び船を動か
に蒸気の力を倍せども其
軍の脱兵おく色を生
洲に吹付られ忽ち暗礁に
ねば最も危き船の裡に
支離たるば榎本ども海
しく鎮まりしくば僅うふ
ひたり然して連日暴風止ま
後十餘日を経て風波
て在ること四日に至り風少
斯器を携へて上陸に及びしに
為に全船悉く破碎しぞ

抑此開陽丸ハ去る壬戌の歳台命ニ依り榎本等両三名阿蘭陀ニ留学し同國「ドルトレクト」と言ふ地ニ於て六ケ年の星霜を経て新ニ製造せし軍艦にして大砲二十六門を架し蒸氣力四百馬力を兼ぬ尓ニ依て戊辰の正月伏見の事件起りし時も摂海ニ於て薩芻の軍艦春日丸且つ鉄製蒸気船を追ふて阿波洋ニ至り両船と砲戰數合終ニ鉄製蒸気船をして由岐浦ニ自焼ゑさしめ又春日丸ふも弾丸數十を蒙らせ僅ニふ自國ニ逃帰る支を得せしめたるの堅艦みして其後も品海房總の海邊ニて屢威力を逞しうせし本邦第一の軍艦にしてみ此不幸ニ罹りしうべ賊徒等暗夜ニ燈火を失ひたるの心地せり初め此船の暗礁ニ觸るや函館の脱兵ニを聞て即刻回天神速の二艦をべ遣ハして救ハんとなれども風波最も烈しくして両艦ふふ近付を得ず是ニ依て回天丸ハ直ちふ轉じて沖ニ去り神速丸ハ此時ニ蒸気の機関を損じたるゆ更ニ進




暴風に遇て開陽艦江刺海邊なる暗礁に觸る

退自由を得ず姑く時を移さんとす又暴風の為に海岸に吹揚らるる其船忽ち傾きしうべ奈何ともなすべきやうなく兵士等軍器を携へて急ぎ上陸為たりしが此艦も船底破るる再び用を做さずと言へば夫れ偖なき土方松岡等の二隊の兵はものく江刺に着せしに既に平定に及びて海軍の脱兵等が這地を守り居たりしが暫時休息を做せしに更に敵兵の寄せ来ること既に松前の藩主に當所を退去あらんと議ずる

尚館村の新城に藩兵籠り居るこの度追ひ退けおべ在るべきと躯て陸軍の全隊も以て此手に向ハしめんとするに兵士等深雪に踏分て既に館村の城に逼るべ藩兵も城門を閉ぢ堞の間に鉄砲を配りて頻りに乱發に及ぶに寄手ハ峻しき山川を超て押寄せたる度ごとに大砲を放ちて牽く度毎ハ唯小銃を連發して進に向へるのみなれば須臾の程も果敢くして勝敗を見ざりしが

脱兵のうちに於て越智一朔伊奈誠一郎と喚ぶる者砲烟のうちに紛れ城際近くさし寄りて門扉の隙より潜入り忽ち関木をうち外し城門さと推開きて頻に射方を招ぐみぞ寄手ハこれに便りを得て一度に噪と籠入りたり然れども此城に在留ふせる藩兵ども松前江刺の両所をば輙く敵に攻取られし憤激ゐせる輩ゐれを些ともも屈まる色を見せぬおのく決死の勢ひをなして

防戦まる支数合に及べど敵に要所を乗破られバ射方の隊伍大いに乱れて殘を負へる者尠うも遂に敵まる支を得ず皆散々に討ゐされる其時藩兵の中にしく顕れ出たる大坊主ひとり自ら三上超順と名告り敵の乱丸雨の如く飛来る中に跳り入り左手に組板を携へく弾丸を防きみぎり右手に一刀を振りかしく群る敵を薙立たる勢ひ猛虎の暴なる如く向ふに前のあた

所へ賊軍の其中より伊奈誠一郎と喚はりて手鎗を以て突てかゝる成超順太刀もて受あゞし姑く挑を戦ひしが武勇勝れ三上が為に誠一郎ハ斫りたゝるを最も危く見るゆゑ脱兵横田豊三郎ハ伊奈が危急を援けんと短銃をもつて馳来り急に あをを撃んとするに奈何ぞしらん鉄機発せざ其虚間に超順ハ誠一郎を斫仆し又横田をも討んとする勢ひ最も鋭どくれバ豊三郎ハ鉄砲投捨て刀の柄に手をかけて抜らんとするに暇いとまなくねバ二足たゞ引んとせしに此時雪の積ること三尺に餘るを過つて足を滑らし仰向さまに仆る所を超順得たりと飛蒐り只一討に做んとする時賊の軍監堀覚之助此形状を見るよりも南無三渠を討せくいと雪を踏立て馳来り持たる鎗をさし伸て勢ひ込んたる超順が後ろより突串くゆゑ強勇無類の超順なれど急所の深手に堪り得ず遂に命を殞せ

超順奮勇
賊徒若干
を砕て遂
に戰死せ

うべ此援け能得て豊三郎は辛く命を保ちしぞ余ば
松前の藩兵はかりく防戦為たれども敵の鋒先鋭くれ
ば或は開處より討死し其餘は柵を乗踰て脱去りしも
多くうしうべ終に此城落居せり然れども賊兵等も
雪中頗る奮戦をせしより將士何れも倦労れるに
且つ小勢なるに依て這所に留り守らんとせ
ど城に火を掛け焼拂ひて皆鶉村に退けり余ば又松前
の藩主なる鄕に江刺を退去して熊石と云所に在り

然るに館村の城も落居して残兵此地に逃来りし
ば一藩大いに駭きて或は議して言へるやう當家既に
四百年来代々封土とせし所を一朝賊徒に奪はれてい
上を朝廷に對し奉り下は祖宗に向ひても又謝せ
べきの辞なし此うえは賊軍の此地に襲ひ来ると邀へて
一藩悉く斬死せんと或は是を禁めて曰く小を曲て大
を伸る素より籌策の存する処今朝兵の至ると俟く
恢復の再挙を謀るも何ぞ遅しとする支ひらん死を

易くゝ生ハ難ゝ思ひくたを思ひくこそ支と挙る
の時ハかうめと言ふよ一同決議せゝうべ新田主税と言
へる者よ兵三百餘を属ハしめ賊徒の備へよ残ゝ置き
藩主を始め自餘の兵士そ十九日の夜熊石と去り津
軽領平舘へ残らぞ退きたうゝと言ふ

明治太平記四編巻之一終